

書評：唐沢かおり・戸田山和久編 「心と社会を科学する」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片岡, 雅知 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37496

書評

唐沢かおり・戸田山和久編『心と社会を科学する』

(東京大学出版会, 2012年7月, 232ページ, 2900円, ISBN 978-4-13-013306-7)

集団の心はさまざまに語られる。「委員会」にはその「見解」があるし、「組織」にはそれぞれの「気風」がある。コンサルは「会社」の「体質」改善に奔走するし、「チーム」の「目的」のためには多少の犠牲もやむを得ない。「大国」はグローバル化を「求めて」いるが、それに「反対する」「地域」もある。「群衆」「心理」、「お国」「柄」という言葉もある。そして、「日本人」は「大和魂」や「おもてなしの心」を持つ……。

社会心理学という学問があると知れば、それはこうした「集団心」についての科学なのだ、と、評者ならずとも思うだろう。ところが現在のところの社会心理学はそういうものではない。そこで、現行の社会心理学の方法論を社会心理学者と科学哲学者で見直し、もっと面白い研究をする方法を考えよう。これが本書の基本的な趣旨である。2人の社会心理学者と2人の哲学者の手になる都合8章がおさめられている。

本書は次のような社会心理学史認識に貫かれている(2章、4.1)。かつてデュルケムもヴェントも集団心の研究をしたし、社会心理学黎明期にもマクドゥーガルに代表されるような集団心の研究はあった。ところが1924年、F・H・オルポートは、社会的行動や相互作用を集団心で説明するのは非科学的だと強く主張した。この「集団錯誤」の批判は、同時に個人の行動レベルでの分析と実験の重要性を強調するものでもあった。その後集団心研究は鳴りを潜め、「個人」が社会をどう理解するか、他人からどう影響を受けるかを研究し、「個人」の心のモデルを構築する今日の社会心理学の標準的な方法論が確立した。編者である社会心理学者の唐沢はこれを「個人焦点の方法論」と呼ぶ。つまり、現在の社会心理学のコアは個人の認知の研究なのである。

唐沢によれば「個人焦点の方法論」には大きなメリットが2つある(3.1)。まず、個人を対象とした研究はデータ収集がしやすい。次に、社会心理学は人々の素朴心理学を研究対象とすると同時に、それを説明する際に素朴心理学的概念を洗練させた科学的概念を用いる。個人の心に焦点を当てる事で、「動機」「感情」「態度」などなじみ深い素朴心理学のリソースを説明概念として利用する事が可能になり、提出される心のモデルは直観的に理解しやすいものになる。こうした点は、社会心理学が実証的な科学として成功していくために重要なものであった。

しかしオルポートの言葉は同時に呪いでもあった。では「集団心」はどこへ行ってしまったのだろうか？ 現在の社会心理学では集団心についてうまく研究できない！これが著者らを本書執筆に向かわせた大きな原動力になっている。さらに集団心の研究は社会心理学の「よそ」からも期待されている。哲学者の戸田山は2つの例を挙げる(5章)。一つは認識論。「科学の基礎付け」を放棄した今日の認識論には心理学と手を携えることが不

可欠であるし（認識論の「自然化」、さらに、科学知が集団によって成立するという面を無視することはできない（「社会化」）。続いて技術者倫理学が挙げられる。技術者は普通チームで働くので意思決定が集団で行われやすい。しかし集団的な意思決定のあり方には、組織の「風土」が関わっており、メンバーが入れ替わっても簡単に変わるものではない。これらの研究分野が集団心の科学から益される事は明らかである。

では、具体的をどうすれば集団心の研究ができるのか。哲学者曰く、心身関係に関していかなる哲学的立場を取ったとしても集団心の存在がア priori に否定されることは無い。必要なのは方法論の問題だけだ（6. 1）。唐沢と戸田山は、その方法論の青写真を次のように描いてみせる（3. 3、6. 2）。既に見たように、社会心理学は素朴心理学を研究対象とすると同時に、素朴心理学的概念を洗練させた科学的概念による説明をおこなう。ところで本書評冒頭にもみえるように、我々の素朴心理学は実際に集団心を含むようなものなのである。とすれば、まず必要なのは素朴な集団心理理解を精緻に研究することである。そしてそれを手がかりにして、個人の心と似た機能を果たす集団の「何か」を概念化する事が出来るだろう（3. 2、6. 3）。

このようにして取り出される概念は、測定と関連づけられ科学的概念として更なる洗練を受けなくてはならない。この集団心の測定という難しい課題に対する本書の提案は4章に見る事ができる。この章で社会心理学者の山口は、集団の心を測定するこれまでの試みとその欠点を概観した後、極めて基本的な方法、「観察」に着目する。山口は集団の心的特性の例として「集団内のコミュニケーション構造」を取り上げ、これを測定する技術として「ビジネス顕微鏡」という興味深いシステムを紹介している。これは、小型のセンサーを集団の各メンバーが装着する事で、各人がいつ誰とどのようなコミュニケーションをしていたかを逐一記録することができるシステムである。このような行動観察で測定できる集団全体の客観的特性と、集団のメンバーの主観的な認知の共通性の関係性を検討する統合的なアプローチは、集団心の科学の具体化へ向けて大きく踏み出している。

ここまでは集団心の話である。しかし唐沢は、「個人焦点の方法論」の見直しをただ集団心の研究のためだけに必要なものだと考えていない。そもそも社会心理学は、社会的行動を説明するために「脳から文化まで」さまざまなレベルの要素を考慮してきた。社会心理学がこのポテンシャルを最大限に生かし、他領域とコラボレーションしつつ心に関わる現象を重層的にとりあつかう「プラットフォーム」となるためにも、「個人焦点の方法論」の見直しが必要だとされるのである（3. 4）。「社会心理学がとるべき大域的な方法論は何か」という大きな問いに一定の答えを与えようとする哲学者の出口による7-8章は、こちらの問題意識にも応えるものだと言える。これらの章では、個々の研究から得られた測定値をメタアナリシスによって統合しネットワーク化していく方法が具体的に示され、互いに競合し合いながら大きくて質の高いネットワークをつくること「こそ」が、社会心理学のあるべき姿だと論じられる。ネットワーク化は個々の測定が実在に届いている事を保証するとともに、様々な要因を考慮する社会心理学がバラバラな知識の集積に留まってしまう事を防ぐ。これによって社会心理学の「プラットフォーム」化は促進されるだろう。

以上が本書の概要である。率直に言えば、各章で内容が重複しすぎていて一冊の本としてバランスがおかしい嫌いもあるが、これはそれだけ新しい道を切り開くための議論が綿密に重ねられていることの証だとも言えよう（その様子は最後におさめられた座談会からも窺い知ることできる（終章））。社会心理学と科学哲学のコラボレーションの端緒たる本書は、著者らと専門を同じくする社会心理学者や哲学者はもちろん、心を研究する様々な学問の研究者、そして新しいもの好きやお祭り好きが読んでおもしろい本になっている。

評者自身は本書で描かれた見通しは極めて明らけると考えるが、その問題提起の性格を鑑みれば、本書の真の評価は今後具体的にどのような経験的探求が現れるかに全面的にかかっていると言えるだろう。そこで最後に、本書の可能性をさらに広げるかもしれない話題を付け加えておきたい（というのは建前でこれは評者の研究の宣伝でもある）。

既に触れたように著者たちの提言の一部は、素朴心理学による集団への心の帰属をもつと研究しようという点にある。素朴心理学が集団に心を帰属させているという事実を、実は哲学も見逃していた訳ではなかった。80年代の終わり位から、分析哲学者は我々の素朴な集団的概念を分析し、精緻な形で取り出そうとする試みを行いはじめている（Gilbert, 1989; Bratman, 1990）。こうした研究は、「集団的志向性（collective intentionality）」なる語の下に括られることが多いが、心理学を中心とした経験諸科学とのかなり実質的なコラボレーションがはじまりつつある状況である（Knoblich et al., 2011; Tomasello, 2009）。

評者の目の届く範囲ではこの種ベタな哲学的探求が社会心理学と結びついている例はいまのところあまり無いが、これは偶然的事情にすぎない。ベタな哲学研究と社会心理学の交流が豊かな成果をもたらすことは、例えば自由意志の研究（Baer et al., 2008）や、実験哲学の運動全体（Knobe et al., 2012）が既に立証済みである。

唐沢の思い描くプラットフォームとしての社会心理学が実現する日がそう遠からず来るだろう。そしてそれは、著者たちがいま想像している以上にワクワクする楽しいことに違いない！。

片岡 雅知（東京大学大学院総合文化研究科修士課程）

参考文献

- Baer, J., Kaufman, J. & Baumeister, R. (eds.) (2008), *Are We Free?* (Oxford University Press)
Bratman, M. (1999), *Faces of Intention* (Cambridge University Press)
Gilbert, M. (1989), *On Social Fact* (Princeton University Press)
Knobe, J., Buckwalter, W., Nichols, S., Robbins, P., Sarkissian, H. and Sommers, T. (2012),
Experimental Philosophy. *Annual Review of Psychology*, 63, 81-99
Knoblich, G., Butterfill, S. and Sebanz, N. (2011), Psychological research on joint action: theory and data. in B. Ross (ed.) *The Psychology of Learning and Motivation*, 54, Academic Press, 59-101.
Tomasello, M. (2009), *Why We Cooperate?* (MIT Press)

¹ 書評に謝辞をつけるのはおかしき気もするが、ほぼ毎週に亘って評者に社会心理学を啓蒙して下さる渡辺匠・櫻井良祐両氏（東京大学）に感謝する。